

ソーマ・モルゲンシュテルン『放蕩息子の遺書』

——コウノトリとガリチアのユダヤ人

富 山 典 彦

## はじめに

ガリチア出身のジャーナリストにして作家ソーマ・モルゲンシュテルン Soma Morgenstern (1890-1976) については、これまでに数本の論文を書いた<sup>(1)</sup>。フランツ・カフカ Franz Kafka (1883-1924) から始まり、ヨーゼフ・ロート Joseph Roth (1894-1939) やエルンスト・ヴァイス Ernst Weiß (1882-1940) を経て、何人かの、とくに兩大戦間時代のオーストリアの作家・詩人に研究の視野を広げてきたが、このところ、ガリチア出身のジャーナリストにして作家モルゲンシュテルンに集中している。これまでの私の研究の方向性を振り返りつつ、新たな展開を期するため、モルゲンシュテルンの三部作『奈落の火花』 *Funken im Abgrund* についての論考を、ここでひとまず終えることにしたい。

三部作『奈落の火花』は、繰り返しになってしまうが、『放蕩息子の息子』 *Der Sohn des verlorenen Sohnes*、『追放のなかの牧歌』 *Idyll im Exil*、『放蕩息子の遺書』 *Das Vermächtnis des verlorenen Sohnes* の三作からなる。第一作と第二作は、細かなことは抜きにすると、作品構造はきわめて単純である。故郷を捨て、キリスト教に改宗し、大戦で戦死したユダヤ人を父に持つアルフレート、すなわち「放蕩息子の息子」が、ガリチアの故郷に住む父の弟たちとウィーンで出会い、故郷に連れて帰ってもらう、というのが第一作『放蕩息子の息子』である。伯父のヴェルヴェルとそれに付き従うヤンケル老人のウィーンへの旅立ち、ユダヤ人会議に対する爆破事件を契機にした彼らとアルフレートとのウィーンでの出会い、そしてこのアルフレートを父の故郷に連れて帰る旅という、楯円運動になっているのがこの第一作である。

第二作『追放のなかの牧歌』は、ユダヤ教についても故郷ガリチアについ

でも何も知らないままウィーンで育ったアルフレートの、ガリチアの寒村ド  
 ブロポリエでの一年間を語っている。アルフレートは、父が捨てたユダヤ教  
 の伝統に立ち返ることを期して、ユダヤ人が非ユダヤ人を蔑称する「ゴイ」  
 とあだ名をつけられている老人ヤンケルを師として、この道を歩もうとす  
 る。これこそユダヤ教を捨てた放蕩息子の Teschuwa<sup>(2)</sup> であり、「放蕩息子」  
 である父ができなかったことを、その息子が果たすことになる。この1年間  
 には、アルフレートとウクライナ人の少女ターニャとの恋愛が挿入されてい  
 るが、もともとウクライナ人が多数を占めていたこの村に、第一次大戦後  
 ポーランド人が移り住み、このふたつの「民族」の間にあった緊張関係が、  
 この作品世界のエトスともなっている。そして何よりも忘れてならないこ  
 とは、アルフレートが出会った天才少年リーブッシュの突然の死である。

ヤンケルを師にしていたアルフレートだが、この少年との出会いにより、  
 師はアルフレートからリーブッシュに移る。リーブッシュからさまざまなこ  
 とを学ぶが、とくに、傷ついて飛べなくなったコウノトリを保護している場  
 面は、第三作につながる大きな意味を持っているのだが、第二作を論じた拙  
 論ではたんに指摘するにとどめた。したがって、本論では、このコウノトリ  
 についてさらに一歩進んで考えたい。

第三作『放蕩息子の遺書』は、前二作と違って、前述したように作品世界  
 全体を端的に表すことが難しい。表題からすれば、アルフレートの父の生前  
 に書き残した手記が作品の中心になるであろうことは、容易に推測できる。  
 実際、ウィーンに住む母の誕生日に帰ることを約束していたが、こちらでの  
 滞在が予定外に長引いてしまい、母の誕生日を逸してしまったアルフレート  
 のもとに、伯父と慕うドクター・フランクルがはるばるドブロポリエまで  
 やって来る。そのときその手に大事に携えてきたのが、アルフレートの父に

預けられていた長文の遺書である。第三作の中心は、アルフレートが20歳になったとき渡してほしいと頼まれていたこの遺書ということになる。この遺書には、忘れられた故郷ガリチアの大戦前の実像がきわめて明確に語られているが、この作品は、ただそれだけではない。第二作ではほんの小さなエピソードでしかなかったコウノトリが、第三作でもやはりその程度のもんとしてしか語られないように見えながら、アルフレートの夢のなかに出てきてアルフレートと語り合う場面でこの作品が締めくくられることを考えると、コウノトリの意味を考えると、この三部作を理解することはできないだろう。

コウノトリは、海を越えてエジプト方面に渡り、そこからヨーロッパへは卵を産みに帰ってくる。そしてヨーロッパで卵を産み、雛を育てたあと、また海の彼方に去って行く。コウノトリはこのように、二つの大陸を往復して生きるのだが、それは、単純に考えれば、世界のどこにいても故郷というものを持たないユダヤ人ということになりそうだが、そうではない。リーブッシュはコウノトリの話を、ユダヤ教のトーラや説話などから学んだのではない。小学校のポーランド語の教科書に、コウノトリと神様との対話が書かれていて、そのことをある日アルフレートに話している。

このことから考えても、コウノトリという存在をどう捉えるかということが、一見単純だが、一步踏み込むと先の見えない作品世界を照らす蠟燭の灯となろう。

## I

三部作の第三作は、前二作とは違って、冒頭部分にこの作品の主人公であ

るはずのアルフレートも、ヴェルヴェルもヤンケルも登場しない。村人たち、それにこの村の書記が入れ替わり立ち替わり出てきて、作品の「筋」はただただ混乱するばかりである。ただ、すでに第二作を論じたときに指摘したように、この作品から単純な「筋」を読み解こうとすべきではない。むしろ、「筋」とは直接関係がないように見える描写にこそ、この作品の意義があると考えてよいだろう。ただそれだけに、とくに第三作の第一部は、それを簡潔にまとめることが難しい。

村人たちの素朴な会話から、かつての帝国の辺境ガリチアの寒村に暮らす人々、とりわけユダヤ人の実像が垣間見られる。おそらく数百年間ほとんど変化がないであろう村人たちの日常、時代から超越したというのではなく、むしろ時代に取り残されたとしても表現すべき日常がここに現れる。中心になる人物たちが前面に登場する第一作や第二作とは違って、そういう世界を知る機会のない読者を混乱させる。しかし、この部分をヨーゼフ・ロートのガリチア物と呼ばれる作品と比較してみると、ロートの作品世界のあからさまな虚構を見つけ出す作業に役立つであろう。

ただここでは、変化のない日常とはいっても、やはり事件と呼べるものがある確率で起こり得るし、実際、天才少年リープッシュの殺害事件が起こっている。この事件のその後のことが前作に続いて語られていれば、「筋」の展開ははっきりしていただろう。では、モルゲンシュテルンはなぜ、第三作をそういう作品の読みやすさから遠ざけたのだろうか。

まず考えられることは、この作品が執筆当時に公刊される見込みがなかったことだろう。作者は、この作品を買って読む読者のことを、ほとんど考える必要がなかった、いや、考えることなどできなかった。読者という、言わば作品の出口を失ったとき、作品世界はどう変化するのだろうか。出口のない

世界、そこでは、あらゆる事象が、渦を巻くことになるのではないだろうか。モルゲンシュテルンは、青年時代に捨てた故郷ガリチアを、ここでもう一度蘇らせようとしているのだ。

もちろん、混沌とした星雲のなかにも、いくつか超新星の出現が考えられる。天才少年の存在がそのひとつだが、その死の波紋は、その軌跡を正確に跡付けることなどそもそも不可能なほどに広がっている。そこから何か拾い上げるとすれば、村の書記への陳情だろう。リープツシュの死は、明らかに集団暴行殺人事件である。もはや帝国が存在しないとはいえ、後継国家も法治国家であるのだから、この事件は警察の捜査の対象であり、実行犯は逮捕され、起訴され、裁判により相応の刑を執行されなくてはならない。リープツシュの埋葬は、第二作の末尾ですでに終わっているが、この殺人事件については、何もなされていない。その手続をするのが、新たにこの村に派遣されてきた村の書記の任務なのであるが、ユダヤ人の少年の死など、彼は問題にしようもしない。犯人を捜し出すよりも、事故死として処理してしまえばいい、ということである。マトゥーラ、ドイツでは一般にアビトゥーアと呼ばれる大学入学資格を持っていることを、何かにつけて鼻にかけている書記にとって、リープツシュの事件など、なかったことにしたいのである。

ウィーンで育ち、ユダヤのこともこの村のことも何も知らず、リープツシュを師と仰ごうとしていたアルフレートにとって、その死は、悲しみの域をはるかに超えたことである。しかし、被害者の家族、とりわけ息子の死の切掛けを作った父親の気持ちは、どうだろう。犯人たちを捜し出して処罰しても、死んだ息子は戻ってこないが、有耶無耶にされることなど許せるはずがない。

もうひとつ、この村の書記が関わることは、シャプセが豚肉の販売の免許

を書記に申請していたことだ。殺人事件と違って、これは書記にとってそう難しいことではない。しかし問題は、ユダヤ人が豚肉を商うていいか、ということである。ユダヤ人には事細かな戒律があり、その中でもよく知られていることとして、豚肉を食べてはならないというのがある。豚肉は不浄とされ、コーシエルな肉屋では一切扱わない。ということは、馬車屋であり、馬を世話して生きてきたユダヤ人が、豚を商うということは、この戒律に反するとともに、戒律を守って生きるユダヤ人たちと離れることを意味するだろう。もっとも、現実にユダヤ人の豚商人は存在しているし、のちに、ウィーンから「放蕩息子の遺書」を携えてアルフレートに会いに来た同化ユダヤ人フランクルは、「私の知る限り、ユダヤ人の豚商人はまれな存在ではない」<sup>(3)</sup>と断言している。

いずれシャブセは豚肉商人として成功し、もはやユダヤ教徒としてではなく、西側の商品経済に組み込まれた商人として生きる道が開けることだろう。歴史的に見ると、このようにして成り上がったユダヤ人の数は少ない。シャブセがそのようなユダヤ人になれるかどうかということだが、やがてナチによる支配がその道を断つことになろうなどと、この時点ではまだ誰も知らない。

三部作全体の表題が『奈落の火花』であることを思い出してみると、ほとんど何の変哲もなく繰り返されているように見えるこの辺境の一寒村のユダヤ人にも、確実に外的および内的な変化ないし危機が迫ってきていることがわかる。作者は、敢えて語り手がそれを明言することを避けているように見せている。すべての読者には、その「奈落」が見えているのだから。

ほとんど何の変化もないように見える寒村にも、時代の変化の波は押し寄せてきている。この第三作の第一部の、簡単にはまとめようのない記述は、

そのとりとめのなさによってかえってそれを強く印象づけている。この作品の中心は、フランクがウィーンから携えてきた「放蕩息子の遺書」にあるのだが、その中心を星雲のように覆っているこの第一部こそ、重要なのである。

ウィーンで暮らす同化ユダヤ人の典型であるフランクと、ガリチアに暮らす伝統的ユダヤ人たちとの邂逅、しかもそれは、ウィーンではなくガリチアでのことである。それは、きわめて稀なことであるに違いない。同化ユダヤ人にとって生まれ育った故郷は、遙か以前に捨ててきた世界であり、二度と戻ることのない過去である。そのように考えると、そもそも同化ユダヤ人でさえないアルフレートが、父の故郷に戻り、そこでユダヤ教に触れ、可能ならばユダヤ教の伝統に戻りたいと思うのは、ほとんど有り得ないことである。

同化ユダヤ人のフランクは、友人ヨーゼフ、もとの名前はヨッセレの故郷に、その遺書を携えてやってきた。アルフレートとは違って、故郷回帰の意思はない。むしろ、アルフレートが心配するように、同化するに際して、ユダヤ教そのものを完全に捨てているのではないか、という疑念がある。ドブロボリエで行われたサバトに、フランクも加わるが、アルフレートはサバトのことを何も知らなかった自分自身のことを思い出して、フランクのことを心配する。

しかし、これは杞憂、フランクは、ユダヤ教の伝統のなかで育っていたのだ。ウィーンではそのことを示すようなことはしないが、ユダヤ教の伝統は、ちょうどその身体に残された割札のように、生涯消えることはないだろう。ユダヤ教から完全に離れることは、ウィーンで学位を取得し、ジャーナリストとしての地位を得た同化ユダヤ人にも不可能なことだということが



ここから読み取れる。

さて、フランクルが持参したヨッセレの手記が、アルフレートとフランクルそれにヴェルヴェルとヤンケルの4人によって読まれていく。従軍し、前線に駆り出された父は、死を予感し、まだ幼い一人息子に、暇を見つけては、さまざまなことを書き残す。語り手は父親、読み手は息子という、きわめて限定された物語世界が、ここに生まれる。

語り手がこの「物語」を書いているのは、そのときの「今ここ」である。だから、途中で何度も、その語りは中断される。中断しながらも、語り手は、自分のそれまでの人生を、事細かに語り続ける。ユダヤ人でありながら、地主であるという特異な家の長男として生まれ、この家を継ぐことを前提に育った少年時代。

自らの人生を真剣に考え始めたとき、彼は故郷もユダヤ教も捨てて生きる道を選ぶ。それは、ハプスブルク帝国の臣民として生きる道でもある。だから彼は、この帝国に自らの運命を託し、帝国が減じるよりほんの少し前ではあるが、戦場での死を迎える。

父親は、その父親について何の記憶もなく育つ息子に、何を書き残しておこうとしたのだろうか。とくに気になるのは、ユダヤ教からキリスト教に改宗するという問題だ。しかも、彼の前には、ローマ＝カトリックとギリシャ＝カトリック、二つのカトリックがあり、もちろんルター派やカルヴァン派もある。この作品には書かれていないが、正教にも、ギリシャ正教、ロシア正教、セルビア正教、ウクライナ正教などがあるが、オーストリア＝ハンガリー二重帝国に住むユダヤ人だから、カトリックを選ぶことはふつうだろうが、主流であるローマ＝カトリックではなく、あるいはまたギリシャ正教でもなく、ギリシャ＝カトリックを選ぶ。

大戦前のガリチアがどういう状況にあったか、その背景にある世界とそこに生きるユダヤ人の状況が、事細かに語られている。語り手は、自分の息子への遺書として書きつつ、それをはるかに超えている。一方、この「物語」を読む側でも、予期しなかった事件により、その読むという行為を中断しなくてはならない。それは、リープッシュの事件をうやむやにしたばかりではなく、被害者の側に重度の過失があったかのような記事を書いた村の書記に対して、ヤンケルが反発して投石したという冤罪事件が起こり、ヤンケルが逮捕されてしまったことである。

アルフレートは、無罪のヤンケルを救うため、弁護士と、帝国崩壊後も隠然たる力を持つ伯爵夫人を訪問する。カフカの『審判』なら、アルフレートは見えない裁判所によってがんじがらめになっていくところだが、もちろんこの作品はカフカの世界とは違う。ヤンケルは無事に釈放されて、ドロボリエに戻ることができる。

そこでまた、父親の書き置きの続きが読まれる。さて、この中断は、どういう意味を持っていると考えられるだろうか。読む行為が、語られた世界の時間の進行に位置づけられているのである。

遺書が書かれた時間と、その遺書が読まれる時間、それと、語られた世界の実際の時間の進行とが、遺書が書かれた過去と、遺書が読まれている現在を、適度に隔てながら、同一の物語世界として統一されている。

## II

さて、本論の主眼点であるコウノトリについて、若干の考察を試みる前に、この作品の構造と、それに付随するいくつかの問題を整理しておこう。

作品の表題が『放蕩息子の遺書』とあるように、アルフレートの父が書き残した遺書が、この作品の中心にあることは言うまでもない。しかし、この作品の書き出しは、これまでとは違って、アルフレートもヴェルヴェルもヤンケルも出てこない。なんということはない村の日常的会話に始まる。

もっとも、この章には、ある重要な意味が隠されている。馬車屋のシャプゼと村の書記とが、馬車で町まで出かけるのだが、馬車の運行似てその緩慢な作品の時間の経過のなかで、とくに注目すべきことは、シャプゼが豚肉を扱う商人になるための許可証を取得することと、村の書記が、リーブッシュの殺害事件を「事件」としてではなくやむを得ない「事故」として処理してしまうことである。

そしてこの作品の主要部分であるアルフレートの父の、息子に宛てた遺書の記述になる。これは、父ヨーゼフが世界大戦に従軍したとき、戦場での死を覚悟してウィーンに残してきた一人息子に託したものである。もっとも、それ自体は、友人のフランクに、息子が20歳になったら渡してほしいと渡されている。そしてその日が、ついに来たということである。

私はこの封をされた包みを、1916年にズロチョウの公証人から受け取った。それはアルフレート君のためのものだよ。君のお父さんはこの包みに付けた手紙で、君の20歳の誕生日にこの書き物を君に渡してくれるようにと私に頼んだ。<sup>(4)</sup>

フランクが祖父の部屋に到着したのは月曜日で、早速、アルフレートとフランク、それにヴェルヴェルとヤンケルは、この分厚い遺書を一緒に読み始める。そこに書かれているのは、アルフレートの父でありヴェルヴェル

の兄であるヨッセレ、ドイツ語で言うとヨーゼフの、ガリチアでの少年時代のことである。ヴェルヴェルにとっては、自分の過去とちょうど重なるのだが、同じ体験を、兄と弟とでは別の体験として記憶していることがわかる。書いているのはちょうど前線にいるときで、前線での勤務のために、何度か中断される。

語り手ヨーゼフの語っている現在と、語られている過去と現在、それにこの時点から見ると読まれている未来とが、この中断によって絶妙の効果を生んでいる。さらに、語り手の、自分が置かれていた過去と置かれている現在、それにまだ見ぬ未来との心理的関わりも、細かく分析していくと面白いが、この問題はまた別の機会に考えることにしたい。

この遺書に書かれていることの中心は、やはり、ヨーゼフの改宗、つまりキリスト教の洗礼を受けることにある。例えば啓蒙主義の時代にレッシングやラヴァーターに改宗を勧められたユダヤ人啓蒙主義者モーゼス・メンデルスゾーンの子孫で音楽家のフェリクス・メンデルスゾーンはすでにキリスト教徒だったということだし、フランスを皮切りにユダヤ人解放があちこちで行われた19世紀には、ハインリヒ・ハイネのような改宗ユダヤ人の詩人がいる。

ヨッセレは、「私はすなわち、ヴィルナのチェデルのユダヤ人教師よりは、ペテルスブルクの皇帝アカデミーの教授でいることのほうがよい、という確信に至ったのだ」<sup>(5)</sup>と、ある著名な東洋学者である改宗ユダヤ人のことを語っているが、ユダヤ人としては数少ない画家であるシャガールは、このヴィルナの出身であることが、ふと思い出される。もっとも、ヨーゼフ自身は、ハイネやその東洋学者とは違って、「私がユダヤ教から出て行くとしたら、それは、美しいフリッツィ・ベシエクに心を奪われたからだ。この女性

はこの犠牲を払わずには私のものにはならないだろうから。』<sup>(6)</sup>と、愛した女性との結婚のための改宗だと言い切っている。

しかし、改宗するに際して、彼はウィーンではなく、ウィーンから遠く離れた、ロシアとの国境の小都市を選ぶ。それはまた、ヨッセレ自身の故郷ドブロリエでもない。

小都市 H. は国境の小さな町である。国境の建物は二つの部分に分かれていて、一方は ロシアでロシア語の名前が付いていて、他方はオーストリアで、ウクライナ語の名前が付いている<sup>(7)</sup>。

この小さな町を選んだのは、学生時代の友人パリェトカに縁のある場所だったからだ。あるいは、ユダヤ教のラビの家系に育ったヨッセレが、そのユダヤ教を捨てるに際して、ウィーンからできる限り遠い場所を選んだのだろう。しかし、どんなに遠く離れようと、その程度の距離は、神の位置からすれば何の意味もないほど短い距離に過ぎない。ヨッセレは、この小さな国境の町で、大きなシナゴークに驚き、さらには、「奇跡のラビ」がいることさえ思い出した。

そんなに小さな町にこんなに大きなシナゴークがあるなんて、と私はソファーのうえで休みながら考えた。もう疲労で体がくたくたになり、快適に暖まった部屋でうとうとしながら。そのとき突然、深い井戸のなかで月の光がちらちらするように、ある強烈な記憶が脳裏を貫いた。この小都市 H. は奇跡のラビのいるところだったと<sup>(8)</sup>。

ユダヤ人がユダヤ教を捨てるというのは、われわれの想像以上に大変なことであるだろう。この世に生きながら、死んで生まれ変わることができるのなら、それはそれほど難しいことではあるまいが、かつて洗礼者ヨハネのした洗礼が、水死寸前の状態にまで人をヨルダン川に沈めたということだから、まさに死と再生の儀式である。

この儀式を受けるに際して、ヨッセレは、ウィーンからはるかに遠いこの小さな町を選んだのだが、ここには、強大な力をもったラビがいたのである。5日後の金曜日にはキリスト教徒になっているとしても、その金曜日はユダヤ教のサバトであり、どうすればこの罪の意識から逃れることができるか。

ここで父の遺書の一冊目を読み終わったが、そのとき、村の書記に対する投石事件の容疑者として、ヤンケルの逮捕状が届けられ、即刻ヤンケルは連行されてしまう。翌日、アルフレートはヤンケルを救うために、ヤンケルが留置されているこの地域の中心都市へと出かける。

ここで、アルフレートは、父の遺書に書かれていた人たち、例えば、指物師の息子で、今は弁護士になっているユダヤ人カッツ博士に会い、助力を求める。「カッツ博士は、村の書記は公務員ではないという考えである」<sup>(9)</sup>ののだが、とりあえずはまだ何もすることができない。アルフレートは、ここで得られる限りすべての手段を尽くそうとする。

また、アルフレートの驚いたことには、宿泊したホテルにカフェがあり、「ホテル自体はポドルスキーという名前だが、カフェには国際的な名前、つまりカフェ・ブルヴァールという名前が付いており、そのフランス語の名前にもかかわらず、正真正銘のウィーンのカフェだった」<sup>(10)</sup>と、名前からはオーストリアの名残は消されているものの、建物自体はオーストリア時代そのものである。また、次のような記述もある。

二重帝国の陛下、フランツ＝ヨーゼフ一世が、この裁判所の両翼の扉に、生きて座っていたのである<sup>(11)</sup>。

もちろんこの皇帝は、世界大戦中に逝去したフランツ＝ヨーゼフ一世自身ではなく、その皇帝にそっくりの年取った門番である。この都市は、アルフレートにとっては、歴史の教科書でしか知り得ない世界そのものであり、彼はこのとき、すでに失われた歴史の迷路を、あちこち歩き回っているのである。また、カツ弁護士が夕食後に訪れる、ヴィーナー・カフェというカフェがあるが、「そこはシオニストたちがすわっている」<sup>(12)</sup> カフェであり、ここには新しい時代の波が寄せている。

アルフレートは、カフカのような奇妙な世界をうろろうしてはならない。ヤンケルの釈放というただそれだけを求めているにすぎないのに、『審判』のヨーゼフ・K.のように、出口のない迷路のなかを行ったり来たりしている。

また翌日には、ドブロポリエのウクライナ人の女性教師ターニャ・リコチュウナの家に行き、その父親から、この地域に生きるウクライナ人の現状とそれに対する彼の考えを聞かされる。そこには、父の遺書に書かれていた同級生のウクライナ人パリユトカについても話題になる。父の洗礼を助けたパリユトカは、このときすでにギリシャ＝カトリックのプレラートになっていて、同じウクライナ人でも、ターニャの父とは別の考えを持っていた。そしてこのパリユトカはリヴォフ、ドイツ語で言えばガリチア的首都レンベルクにいて、「明日にでも司教になるかもしれない」<sup>(13)</sup> この男に会いに行けばいいと助言している。そういうことをすれば、ますます遠回りになってしまい、所期の目的達成は遅れてしまうことだろうが、モルゲンシュテルンの描

く世界は、カフカに似ていてカフカのそれではない。

次に、アブラハム・エルフェンバインと名乗るユダヤ人が、アルフレートの前に現れる。この男は、いろいろな事情に精通していて、裁判所の前で見た皇帝の影武者のような老人が、「フリサクという名前で、その息子のフリサク博士は、ギムナジウム時代あなたのお父さんのクラスにいましたよ。」<sup>(14)</sup>と教えてくれる。そして、こうして知り合ったフリサク博士は、皇帝そっくりの父親が入りに立っているその裁判所のなかに勤めていて、ヤンケルの件は、これであっさりと片付いてしまう。

こうして、中断されていた父の遺書の4人での読みに戻る。ギリシャ=カトリックの洗礼を受けるために、ウィーンから遠く離れたH.という小都市に来た父は、ここで洗礼の儀式を受けることになるのだが、その前に、父は夢を見る。イスラエルの民を率いてエジプトから約束の地へと旅だったモーセの杖、その杖そのものではないが、ラビの杖がヨッセレとヨッセレの受洗の手引きをしたパリュトカを審判の場に導く。

ここには、死に装束である白い衣装を身につけた5人の裁判官がいた。嘆きの裁判官、小さな裁判官、質問の裁判官、微笑みの裁判官、そして物語る裁判官である。これらの裁判官の審理のなかに、コウノトリが引き合いに出されるので、そのことについては、後回しにしておこう。また、裁判官の審理そのものについても、詳細はまた別の機会に取り上げることにしたい。この夢を長々と息子に語り聞かせたあとで、ヨッセレはこの夢について、次のようなことを言っている。

息子よ、われわれのみる夢のなかには、われわれのなかにはないものはない。この夢のなかで、当時そうであり、あの日に蠢いていた私の



魂の像が閉じ込められているのだ<sup>(15)</sup>。

この作品が、最後にアルフレートが見たコウノトリの夢で締めくくられていることと考え合わせると、夢の世界の重要さは、なにもユダヤ人医師フロイトの説を待つまでもないことだろう。そして、ここでは、ヤコブの階段に象徴される夢の世界にコウノトリが住んでいるということを、心に留めておこう。それは小論の次の章で考察する。

ところが、これほどの覚悟をもって洗礼に臨んだヨッセレだったが、実は、パルテユカの機転によって、すでにウィーンで洗礼を受けてきたことになっていて、H.の神父には、ただその報告をただけということになっていたのである。つまり、ヨッセレの意識では、ユダヤ教を捨ててキリスト教、それもギリシャ=カトリックに改宗したことになっているが、実際は、何もしていないのである。自身もそれを知りつつ、外面的にはキリスト教徒になって、愛する女性との結婚を果たす。

さて、この遺書を、どのように読めばいいのだろうか。ユダヤ人の家に生まれ、ユダヤ教の儀式に従って割礼を受け、日々の暮らしを営んできた者は、たとえユダヤ教を捨てたつもりでも、ユダヤ教からは離れられないで生きるしかないということなのだろうか。

アルフレートは、自分の将来について、これまであれこれ考えてきたが、父の遺書を読み通したことで、ひとつの決意をする。それは、荒れ果てていた屋敷を改修し、そこを拠点にして農業を営み、この地で暮らしていくことであった。もっとも、1929年のこの時点ではこの決意が完遂できると登場人物たちは考えていただろうが、三部作の表題にあるように「奈落の火花」、つまり、これから奈落に落ちていくことは予定されていることなのである。

## Ⅲ

さて、本論の趣旨である、三部作を通じてあちこちに現れるコウノトリの意味についての考察に移ることにしよう。

アルミン・A・ヴァラスは、「何度も登場し同時に多義的なシンボル、それは三部作全体のコンテクストにおいてはじめて解明されるものだが。それをモルゲンシュテルンはユダヤ教の動物象徴からとっている。その動物象徴とは、コウノトリの像である」<sup>(16)</sup> と、Teschuwa を論じた論文で、その重要性を指摘している。

三部作におけるコウノトリの存在の意味について考えるに際して、第一作と第二作でのコウノトリの描かれ方について振り返ってみよう。第一作は、ドブロポリエからウィーンへのヴェルヴェルとヤンケルの旅、そして、ウィーンからドブロポリエへのヴェルヴェルとヤンケルにアルフレートを加えた3人の旅である。

村があり、また村があった。村の教会があり、また村の教会があった。つるべ井戸があり、またつるべ井戸があった。牧師館があり、また牧師館があった。藁屋根のうえにコウノトリの巣があり、また藁屋根のうえにコウノトリの巣があった。村の酒場があり、また村の酒場があった。そのあいだに、畑があり草原があり、草原があり森があった<sup>(17)</sup>。

これと同じ風景が、帰りの旅でも描かれている。ただし、ここでは、新たに加わったアルフレートの視点が付け加えられている。「ときどき、彼はかがみ込んで、自分をそのなかに引き込んでいた雨のなかの見知らぬ世界を眺

めていた。』<sup>(18)</sup>そしてここから、まったく同じ風景描写が始まる。

このなかで、コウノトリそのものは出てこないが、コウノトリの巣が、どの村の藁屋根にもあることが描かれている。冬の間は南にいたコウノトリが、春になるとこの地域に戻ってきて、卵を産み、雛を育て、そしてまた南に帰って行く。それは毎年繰り返されることだから、この地域に住む人たちにとっては、ごくありふれた風景の一部であるにすぎないだろう。しかし、ウィーンしか知らないアルフレートにとっては、藁屋根とそこにあるコウノトリの巣が目を惹く対象であったことは間違いない。しかし、この時点では、アルフレートにとって、コウノトリという存在の意味はわかっていないし、またアルフレート自身も考えようなどとはしていない。

第二作『追放のなかの牧歌』では、ユダヤ教に回帰しようとするアルフレートの1年が語られているが、その1年の終わりのあたりで、若いコウノトリが登場する。もっとも、その時期にはコウノトリたちはすべて、南へと飛び去っているはずで、取り残されたこの若いコウノトリは、もうこの世にはいないはずの存在だった。天才少年リープッシュはアルフレートに、次のようにこの事態を説明している。

「コウノトリたちはもう飛んで行ってしまったよ。ミツライムへ。このコウノトリはヤレマ・リュバクの屋根にいたやつだ。そこに巣を作っていたんだ。こいつは病気で、ヤレマの子どもたちがほかのコウノトリたちから助けてやったんだよ」

「ほかのコウノトリたちから助けてやった、だって」とアルフレートは尋ねた。

「羽根が傷んでいるからね。ほかのコウノトリたちはこいつを殺してい

ただろうね。ミツライムに飛び立つ前に、飛行大演習をするコウノトリが。本物の大演習だよ。兵士みたいなんだよ。コウノトリたちは、すべての村から飛んで来て、草原で相談するんだ。それから飛べるかどうか確かめる。たぶん、若いコウノトリがみんな上手に飛べるようになったかどうか、見ようとしているんだね。」<sup>(19)</sup>

羽が痛んで長い飛行ができないコウノトリは、可哀想なことに、仲間によって殺されてしまうということである。飛べないコウノトリはもはやコウノトリではなく、生きる価値がないということだろうか。オスカー・ワイルドの『幸福の王子』では、仲間からはぐれたツバメが、王子の像と親しくなり、その言いつけに従って、貧しい人たちに施しをし、結局最後はボロボロになった王子の像の足下で死んでしまうが、南の国に帰れなかった渡り鳥の末路を、それは物語っている。コウノトリたちは、自らの決断で、飛べなくなった仲間を、そんな哀れな死から救うのである。

もっとも、わが国にも越冬ツバメというのがいるが、そのためには人間の庇護が必要である。この飛べなくなったコウノトリも、それを哀れに思った人間に保護されている。この飛べなくなったコウノトリは、この三部作の最後の場面で、ある重要な役割を演じることになるが、それはここでは、そのことを指摘するにとどめておこう。

リープッシュは村の小学校に通っているが、そこでは、ポーランドの教科書が使われていて、その教科書には、コウノトリについて次のような記述があり、それについて、リープッシュはアルフレートに質問している。

「そこである農夫があるコウノトリと話した。ねえ、コウノトリさん、

どうしてそんなに悲しくて、嘴を引っかけているんだい、と農夫はコウノトリに尋ねた。お前さんに話せるより多くのものがないのさ、とコウノトリは言った。いったい何がないんだい、と農夫は尋ねた。故郷がないのさとコウノトリは言った。神様が小鳥を創造されたとき、すべての小鳥に神様は故郷をお決めになった。そしてみんなそれに満足し、神様に感謝した。コウノトリだけが自分の故郷に満足しなかった。そこで神様はお怒りになって、コウノトリに呪いを掛けられた。それでコウノトリは、一つの祖国ではなく二つの祖国を持つことになってしまった。だからいつも、この二つの祖国を行ったり来たりしているのだ。これまでもこれからも、決して落ちつくことなどない。死がこの呪いから自分を解き放ってくれるまで。——若旦那様、それは本当なの？」<sup>(20)</sup>

ポーランドの教科書のコウノトリは、二つの祖国を持っている。それは神の呪いということなのだが、このメルヘンに対して、天才少年リーブッシュは、素朴な疑問を抱き、アルフレートにその疑問をぶつけている。このメルヘンによれば、コウノトリは自分の祖国に満足しなかったので神の呪いを受けたということだから、自分の祖国に満足しなさいという教訓を述べた教科書ということになる。単純にいえばそれは、今ここに住んでいる土地が故郷ではない者たち、すなわち、ユダヤ人がコウノトリだということになる。

ユダヤ人のもう一つの祖国とは、エルサレムということになるのかもしれないが、ただ、ユダヤ人はそのもう一つの祖国との間を往復することなどない。ポーランド人からみて、ユダヤ人は今住んでいるこの土地が唯一の故郷ではない、呪われた存在だということになる。しかし、ユダヤ人自身にとって、コウノトリとはどういう存在になるのだろうか。

アルフレートはふたたび草のうえに背を投げ出した。地面のうえに投げ出された魚のように転げ回った。リーブッシュはしばらくアルフレートの様子を眺めていた。それから自分の目をアルフレートから離し、ときどき深呼吸して、コウノトリの子どもをじっと見つめた。それは、赤い脚と輝く嘴で湿地をあちこちつき回っていたが、それにもかかわらず、近くで見ると、死んでしまったラビのモチエ・シーイエのように見えた<sup>(21)</sup>。

この記述からすると、飛べなくなって、仲間から殺される運命にあったこのコウノトリは、ある死者の生まれ変わりのようにも見えるというのである。それは、コウノトリという存在が、ただたんに、ガリチア地方と南の国とを行き来するだけではなく、生の世界と死の世界とを行き来する、ということをも含んでいるということなのだろうか。

そして、三部作の第三作『放蕩息子の遺書』に登場するコウノトリである。作品のなかでは2カ所、コウノトリが重要な役割を演じる場所がある。ひとつは、すでに指摘しているが、ユダヤ教を捨てる決意をしたヨッセレの夢のなかに出てくるコウノトリである。

いま私は、裁判官たちが白い衣装を着ていることがわかった。白い衣装、つまり死に装束だ。

聖書では、コウノトリは Chassida という名である。

Chassida という言葉は、敬虔と同じような意味だ。

お前は、どうしてコウノトリがそんなふうと呼ばれるのか、知っているか。

いいえ、知りませんと、パルテユカは答えた。

コウノトリは聖書の言葉では敬虔という名で呼ばれている、それはコウノトリが自分の愛を示すからだ、と嘆きの裁判官は言った。それなのにコウノトリは、不浄な鳥の一種なのだ<sup>(22)</sup>。

「聖書の言葉」とはヘブライ語のことであるが、同時にまたそれは、キリスト教徒のパルテユカに通じる言葉でもある。キリスト教徒のパルテユカには、なぜ敬虔なコウノトリが不浄な存在でもあるのかがわからない。次に、裁判官はまた別の質問をして、その意味を伝える。

コウノトリが自分の愛を示しているのに、なぜ不浄な鳥の一種なのか、お前は知っているか。

いいえ、それは習っておりませんと、パルテユカは言った。

それは、コウノトリが自分の愛だけを示すからだ、と嘆きの裁判官は言った<sup>(23)</sup>。

このとき、パルテユカは、「知らない」ではなく、「習っていない」と答えた。習っていれば知っているが、習っていないから知らない、もちろんそれは、ごく普通のことかもしれない。しかし、それでは答えとして十分ではないのだ。知の世界の広大さは、「習う」という地道な行為だけではうかがい知ることができない。そこに、ユダヤ教の深い「知」の世界があるのだ。

アルフレートは、古い建物を改修し、ここを中心として、農業を基本にした新しいドブロポリエを夢想する。父親の遺書を読み、その思いを託された息子の新しい門出というところだが、これが10年後には、ナチの軍靴によっ

て踏みつぶされるであろうことを、読者であるわれわれは知っているし、著者自身も、自らの体験とともにそれを思い知らされていたはずだ。現実にはありえない夢想の世界、とはいえ、作品中の人物たちにとっては、そんな未来など予感もされていないから、まだ実現していない現実ということになる。そのような現実への一步を踏み出したアルフレートは、1年前を思い出している。

夕方頃、太陽が地平線に沈むより前に、雲の塊のなかに入ってしまった。アルフレートは小沼の岸辺の傍らにすわっていた。そこは、1年ほど前にリープッシュ少年がコウノトリの物語を読み上げ、コウノトリが本当に呪われた鳥なのか、アルフレートに尋ねた場所だった。そのとき、突然アルフレートを呼ぶ声がして、驚いた。それはドーニャだった<sup>(24)</sup>。

リープッシュの死は、遠い世界で戦死してその知らせ聞いただけの父の死とは違って、アルフレートがその人生で最初に体験した死である。今や、その死と、死を免れたコウノトリとは、アルフレートの意識の深層でなにかのつながりを持ち始めていると考えてよいのではないだろうか。意識の深層には何が隠れているだろうか。生と死、エロスとタナトス、そして、異性への愛だ。だから、このタイミングで、ドーニャが現れ、アルフレートの意識を、リープッシュとコウノトリの思い出から引き離す。

ドーニャとのことは、ここでは詳しく検討することができないが、ヴェルヴェルの家の家政婦の機転で、ドーニャは第二の家政婦となり、いつもアルフレートのそばにいられるようになる。しかしそれはまた、ドーニャとアルフレートとの関係を監視下に置くということでもあり、この時点でドーニャ



はすでに、村のある中年男性との結婚が予定されていた。アルフレートとドーニャは、最初から結ばれることのない、若い男と若い女との「初恋」でなくてはならなかったのである。ここでこの二人の間に行われた会話も、なかなか面白いのだが、小論では割愛し、主眼点に戻すことにしよう。

ドプロポリエでの1年間を締めくくる際して、アルフレートは疲れて、石油ランプをつけたまま眠り込んでしまう。眠りとはすなわち、夢の世界への旅立ちということで、この夢のなかでアルフレートは、1羽のコウノトリと出会う。このコウノトリは、メルヘンの世界ではごく普通のことはあるが、人間の言葉を話すことができた。

人間は新しいことすべてに慣れる、という考えがアルフレートの頭のなかを駆け巡った。人間は新しい空、新しい大地、新しい太陽、新しい人々、新しい小鳥たちに慣れる。しかし、石油ランプに慣れるのは大変だ。

ヤエマのコウノトリだよ。お前の友だちクリープシュの友だちだ。

コウノトリの言葉では、彼はクリープシュという名前だ<sup>(25)</sup>。

コウノトリの言葉ではクリープシュと呼ばれるリープッシュは、現実の世界ではすでに死んでいるが、もう一つの世界では、別の名前で生きているのである。とりわけ、幼くして死んだ子どもは、特別の存在なのである。父の遺書に書かれていた夢のなかにも、5人の裁判官のうち、子どもの姿をした裁判官がいた。

半円形に並んでいた裁判官たちのなかで、物語る裁判官が立ち上がっ

た。そしてこの裁判官はなんと、子どもだったのだ<sup>(26)</sup>。

この子どもの裁判官は、ヨッセレがすでにタルムードで知っているアレキサンダー大王の話をする。ユダヤ教徒には、1年かけてトーラの巻物を読むという大切な宗教行事があるが、このトーラとならんで、トーラにまつわるさまざまな口伝を集めたタルムードもまた、大事な経典と言える。物語る裁判官の話に聞き覚えがあったとしても、不思議ではないが、口伝であるという性質上、さまざまなことが付け加えられたり、書き換えられたり、また削除されたりしている。ある意味では、その場その場で、もともとと同じ話だったものがまったく別の話になることがあり、新しい意味を与えられることがある。

カフカの『審判』の結末近くで、「掟の前で」という話をヨーゼフ・K.は教誨師から聞かされ、それに対する意見を言う場面があるが、この教誨師は、いくつかの別の解釈を提示する。ユダヤ教においては、こういう言葉のゲーム、などと言ってしまふとあまりにも俗になってしまうが、言葉によって成立する、いや、言葉によってしか存在し得ない世界が考えられるのではないだろうか。

このような一連のやりとりのあと、ヨッセレは「そこで私は彼が誰なのかがわかった。それは、私の祖先の大叔父、ラビのアップパだ」<sup>(27)</sup>と断言している。遙か昔に死んでいる祖先が、夢のなかで、子どもの姿の裁判官として姿を現しているのである。他の4人の裁判官も、ひとりひとりの来歴を検討したら、それぞれ、過去にこの世に生まれて死んだ誰かであるに違いない。

父は、この子どもの姿をした裁判官を、自分の祖先の一人だと断定したが、この遺書を読んだ父の弟のヴェルヴェルは。自分の記憶のなかから、そこに

実在したその子どもの姿を重ね合わせる。

この子どもをお前の父はとても愛していた。お前がリーブッシュを愛しているように。この子どもは肺結核のために12歳で死んでしまった。お前の父屋はその子どもが白い死に装束を身につけていたのを見たのだ。そしてそれが心に残る印象を与えたのだ。そして、彼がその子どもを最後に見た姿のまま、夢でも見たのだ<sup>(28)</sup>。

ヴェルヴェルによると、リーブッシュと同じように、幼くして死んだ少年がその白装束の裁判官だというのである。輪廻転生がユダヤ教でどの程度信じられているのかわからないが、ここでは、少なくとも現実と夢との間では、その転生が行われている。そしておそらく、夢の世界にいた存在が、いつかこの世に戻ってくることもある、ということになる。生と死、現実と夢とは、互いに行き来することのできる二つの世界というわけである。

もちろん、それができるのは、すべての人間というわけではなく、神に選ばれたごく少数の者たちだろう。コウノトリと同じ道を飛ぶことのできる天才少年とえば、あまりにもわかりやすい説明になってしまうだろうか。死んだ天才少年リーブッシュは、今はコウノトリの世界にいる。そして、このコウノトリの世界とはどういうものであろうか。

しかし、自分たちの生涯の最高時間は、渡りの道であり、飛行であり、飛行の列だ。われわれは高く舞い上がる<sup>(29)</sup>。

アルフレートの夢に出てきたコウノトリは、自分たちの生のあり方を、こ

う言い放つ。地上高く飛んでいることこそが、コウノトリの生なのだと。だから、このことに引き続いて、自分たちの死についても、次のように語る。

もう一度私は羽ばたいて、コウノトリとして空中で死ぬことにしよう。年老いたアヒルが小さな沼で死ぬのとは違って<sup>(30)</sup>。

このように、アルフレートの夢に出てきたコウノトリは言う。生も死も、コウノトリには空中での出来事なのだと、断言する。そのあと、アルフレートは石油ランプの火に手を触れて目が覚める。すべては夢であり、現実ではないから、アルフレートが夢で見たことはすべて妄想である、などと考えることなどできない。

今生きている人が、過去の死者の再現であり、かつまた、未来の死者の影でもある。アルフレートの父も、ユダヤ教を捨てたときに長い夢を見たが、そこにもやはり、幼くして死んだ子どもが、裁判官の一人として登場している。アルフレートの夢では、死んだリーブッシュのことを、リーブッシュが助けたコウノトリが語る。コウノトリは、たんなるユダヤ人の象徴ではなく、現実と夢の世界とを行き来する存在である。それはまた、生の世界と死の世界とも奇妙に交錯している。

現実と夢とは同一ではないし、生と死もまったく別のものだ。ユダヤ教もキリスト教も、これらと同じように、交錯しつつ別のものとして存在している。生まれ故郷のガリチアと生きる道を求めたウィーンも、またそういう二つの別の世界である。

コウノトリの存在の意味は。これら二つの世界をそれぞれ故郷とするというよりは、これら二つの故郷の間を飛び続けることにある。それは、ユダヤ

教とキリスト教、現実と夢、そして生と死の世界のどちらにも属さず、ただただ飛び続けること、それがコウノトリであり、また、ユダヤ人としてこの世に生まれ、生きていくことの意味でもある。それがまた、パリでの亡命生活とその後のフランスでの収容所生活を経て、アメリカに渡ることでできたモルゲンシュテルンの、ヨーゼフ・ロートをはじめとする亡命のなかで死んだ同僚たちへの鎮魂歌でもある。

小論は、平成 26 年度成城大学教員特別研究による成果の一端を公表するものである。

#### 注

- (1) 2009 年 3 月「生き残りし者の声——ソーマ・モルゲンシュテルンと他者の風景」『成城文藝』206 号、1～16 頁。  
2012 年 3 月「ハプスブルク帝国と辺境——ソーマ・モルゲンシュテルン『放蕩息子の息子』の風景」『ヨーロッパ文化研究』31 集、3～32 頁。  
2014 年 3 月「ガリチアのユダヤ人社会の夢と現実——ソーマ・モルゲンシュテルンの三部作『奈落の火花』における「放蕩息子の息子」」『ヨーロッパ文化研究』33 集、249～286 頁。
- (2) 「ヘブライ語の Teschuwa とは、多面的な概念を示していて、回帰と帰還と同様に悔悛や懺悔の意味を包括している。」(Armin A. Wallas: Umkehr, Wegweisung, Messianismus: Das Motiv der Teschuwa als Grundelement von Soma Morgensterns Romantrilogie „*Funken im Abgrund*“. In: Robert G. Weigel (Hrsg.): Morgensterns verlorene Welt: Kritische Beiträge zu seinem Werk. Frankfurt am Main: Peter Lang 2002, S.27-50, S.29.) この Teschuwa という語を中心にしてモルゲンシュテルンの三部作を論じたヴェアラスはこう説明しているが、作品においても、「悔悛は私の父の言葉では、Teschuwa です。つまり、帰還、回帰です。しかし帰還というのは、道があるところでのみ可能です。私の道は、しかし、私にはそう思われたのですが、終わっています。」(Soma Morgenstern: Das Vermächtnis des verlorenen Sohnes: Dritter Roman der Trilogie *Funken im Abgrund*. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Ingolf Schulte. Lüneburg: zu Klampen 1996, S.139.) なお、この作品からの引用は以

下 Vermächtnis と略し、ページ数を示す。

- (3) Vermächtnis, S.334.
- (4) Vermächtnis, S.126.
- (5) Vermächtnis, S.143.
- (6) Vermächtnis, S.144.
- (7) Vermächtnis, S.159f.
- (8) Vermächtnis, S.164.
- (9) Vermächtnis, S.185.
- (10) Vermächtnis, S.198.
- (11) Vermächtnis, S.201.
- (12) Vermächtnis, S.205.
- (13) Vermächtnis, S.218.
- (14) Vermächtnis, S.224.
- (15) Vermächtnis, S.302.
- (16) Wallas: a. a. O., S ,43.
- (17) Soma Morgenstern: Der Sohn des verlorenen Sohnes: Erster Roman der Trilogie Funken im Abgrund. Herausgegeben von Ingolf Schulte. Lüneburg: zu Klampen 1996, S.39.
- (18) Ebd., S.260.
- (19) Soma Morgenstern: Idyll im Exil: Zweiter Roman der Trilogie Funken im Abgrund. Herausgegeben von Ingolf Schulte. Lüneburg: zu Klampen 1996, S.214.
- (20) Ebd., S.215.
- (21) Ebd., S.223.
- (22) Vermächtnis, S.285.
- (23) Vermächtnis, S.286.
- (24) Vermächtnis, S.345.
- (25) Vermächtnis, S.351.
- (26) Vermächtnis, S.291,
- (27) Vermächtnis, S.302.
- (28) Vermächtnis, S.330.
- (29) Vermächtnis, S.352.
- (30) Vermächtnis, S.353.

参考文献

Robert G. Weigel (Hrsg.) : Vier große galizische Erzähler im Exil: W. H. Katz, Soma Morgenstern, Manès Sperber und Joseph Roth. Frankfurt a. M.: Peter Lang 2005.

Robert G. Weigel (Hrsg.) : Soma Morgensterns verlorene Welt: Kritische Beiträge zu seinem Werk. Frankfurt a. M.: Peter Lang 2002.

なお、この論文集には、三部作『奈落の火花』について、以下のような論考がある。

Klaus Werner: Mit Blick auf Soma Morgenstern: Jacob Klein-Haparash und die ostjüdische Lebenswelt.

Cornelia Weidner: In der Erinnerung liegt das Geheimnis der Erlösung – Exil und Gedächtnis in Soma Morgensterns autobiographischen Schriften

Wynfrid Kriegleder: Soma Morgensterns *Funken im Abgrund*. Aufbau und Struktur.

Armin A. Wallas: Umkehr, Wegweisung, Messianismus. Das Motiv der Teschuwa als Grundelement von Soma Morgensterns Romantrilogie *Funken im Abgrund*.

Andrea Bartl: Der „unkontrollierte Assoziationsprozeß der Gedanken“. Erinnerung in Soma Morgensterns Trilogie *Funken im Abgrund*.

Pam S. Saur: Sentimentality and Piety in Soma Morgenstern's Trilogy *Funken im Abgrund*.

Eva Reichmann: Galizien als Programm. Das Bild der Region in der Literatur, besonders bei Soma Morgenstern und seinen Zeitgenossen.

なお、ガリチアの南に、ヴコヴィナがあり、ここもかつてはガリチアとともに、ハプスブルク帝国の、ロシア帝国と国境を接する辺境であったが、ここからも、例えばパウル・ツェランのような、なにかと取りざたされる詩人が出ている。小論のまとめの段階で、たまたまヴコヴィナ出身の詩人・作家たち、アルフレート・マルグル＝シュベルバー、ローゼ・アウスレンダー、モーゼス・ローゼンクランツ、アルフレート・キットナー、パウル・ツェランを扱った大部の著書が出ている。

藤田恭子『『周縁』のドイツ語文学——ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち』東北大学出版会、2014年。

また、シュベルバーの著作は、かなり以前に翻訳されている。それはおおいに参考にさせてもらったので、ここに挙げておく。

マネス・シュベルバー『すべて過ぎ去りしこと……』（鈴木隆雄・藤井忠訳）水声社、1998年。

マネス・シュベルバー『フルバンあるいは絶滅の記憶』（鈴木隆雄訳）水声社、1998年。